

C 削除とフェイズ性の継承：

A' 移動にもたらず帰結

C-Deletion and Phasehood Inheritance:
Consequences for A'-Movement

長崎大学多文化社会学部 谷川 晋一

Shin-ichi TANIGAWA

1. はじめに

Chomsky (1995) によって生成統語理論に極小主義が導入されて10年程が経つが、近年、Chomsky (2013, 2015) の提唱する枠組みに端を成す形で、新しい変化が生じている。この枠組みは、動機付けなしの移動やラベル付け等の多くの弁別的な理論や操作を採用している点において、従来の極小主義の枠組みとは大きく異なる。本稿では、Chomsky (2013, 2015) の枠組みとそれを援用した拙稿 Tanigawa (2017) の C 削除とフェイズ性の継承を根幹とする派生の仕組みを用いて、A' 移動を伴う構文に新しい分析を提案した上で、これらの分析がもたらす利点を明らかにする。A' 移動とは、主語位置である TP (Tense Phrase) よりも上位にある非項の位置 CP (Complementizer Phrase) への移動を指すが、一般に、*wh* 移動、焦点移動、話題移動の3つが A' 移動に含まれる。本稿では、3節から5節の各節で、特定の A' 移動に焦点を当てた議論を行う。

本稿の構成は、以下の通りである。2節では、Chomsky (2013, 2015) と拙稿 Tanigawa (2017) が提案する派生の仕組みを概観する。3節以降では、Tanigawa (2017) が *wh* 主語構文に提案する新しい分析とその利点を示す。4節と5節では、3節で示す分析を、それぞれ、*only* 主語構文と話題主語構文に拡張する形で新しい分析を提案し、否定極性項目の認可や言語類型論、再帰代名詞の指示について考察を行う。

2. C 削除とフェイズ性の継承

2節では、主語位置である TP への移動を例に、Chomsky (2013, 2015) の枠組みと拙稿 Tanigawa (2017) が提案する派生の仕組みについて概説する。

1 節で言及したように、Chomsky (2013, 2015) の枠組みは、それ以前の極小主義の枠組みとは異なる理論や操作を仮定している。この枠組みにおける中核的な仮定は、(1 a-c) にまとめられる。

- (1) a. Free Merge (Free Move): Merge applies freely, including Internal Merge (movement).
- b. Timing of feature inheritance: Movement operations can apply prior to feature inheritance.
- c. Labeling Algorithm (LA): There is a fixed labeling algorithm LA that licenses syntactic objects so that they can be interpreted at the interfaces.

(1 a-c) の仮定がいかにか機能するかについて、A 移動とみなされる TP への主語の移動を例として見ていくことにする。(1 a-c) に従うと、(2 a) は、(2 b, c) に示す手順で生成されることになる。

- (2) a. John likes cats.
- b. [_α John_[φ] T t_{John} like cats]
- c. [_β C [_α John_[φ] T_[uφ] t_{John} like cats]]

まず、(2 a) のように、DP (Determiner Phrase) と分析される名詞句 *John* は、素性照合等の動機付けなしに、主語位置である T 指定部に移動する。この移動は、(1 a) によって可能となる。その後、(2 b) のように、人称に関わる φ 素性 [uφ] を持つ C が併合され、[uφ] が T へと素性継承 (feature inheritance) される。素性継承がこの手順で生じることが、(1 b) によって保証される。最後に、(2 c) に示すように、継承された [uφ] を持つ TP と [uφ] と対を成す [φ] を本来的に持つ DP との間で素性共有が行われることで、これらの要素が併合してできた統語要素 α にラベル <φ, φ> が付与される。¹ この素性共有によるラベル付けは、(1 c) に示すラベル付けアルゴリズム (Labeling Algorithm) に因るもので、統語要素 α は、音声と意味解釈に関わるインターフェイスにおいて解釈可能となる。

Chomsky (2015) では、上記に加えて、もう一つ弁別的な仮定がなされている。補文標識 (complementizer) *that* が非顕在的である null-*that* 節 (3 a) に提案されている C 削除の操作である。

- (3) a. I think John likes cats.
- b. [_β I think C [_α John_[φ] T_[uφ] t_{John} like cats]]
- c. [_γ I think φ [_α John T_[uφ] t_{John} like cats]]

(3 b) では、(2 b, c) と同じ手順で、名詞句 *John* が T 指定部に移動した後に [uφ] の素性継承が生じている。注目すべきは、[uφ] の素性継承後に、C に加

えて、C と α とが併合してできた β が構造的に削除されるという操作である。この削除は、 $[\text{u}\phi]$ の素性継承後に C 及び C 指定部に素性も語彙的要素も存在しなくなるために可能となる。C 及び β の削除の結果、動詞 *think* が併合するのは、(3c) に示すように、 β ではなく α ということになる。² この分析に従うと、null-*that* 節の派生は、顕在的 *that* 節 (4a) の派生と差別化されることになる。

(4) a. I think that John likes cats.

b. $[_\gamma$ I think $[_\beta$ C=that $[_\alpha$ John T $_{[\text{u}\phi]}$ t $_{\text{John}}$ like cats]]]

顕在的 *that* 節の場合には、(4b) に示すように、C 及び β が削除されない。このように、Chomsky (2015) に従うと、*that* の有無によって、派生及び構造が顕著に異なることになるが、(3) と (4) の相違点について、もう一つ述べておく必要がある。Chomsky (2000, 2001) 以降、主要部 C は、派生の局所的単位であるフェイズ (位相) の核となる主要部 (フェイズ主要部) であり、C 指定部は、フェイズ端部とみなされている。例えば、顕在的 *that* 節 (4a) では、C 及び β が削除されないため、主要部 C がフェイズ主要部、C 指定部がフェイズ端部である。ここで問題になるのは、C 及び β が削除された null-*that* 節 (3a) でのフェイズの扱いである。この点に関して、Chomsky (2015: 11) は、C が削除されることによって、そのフェイズ性は、T に継承され、T がフェイズ主要部、T 指定部がフェイズ端部として再分析されるフェイズ性の継承を仮定している。

ここまでは、Chomsky (2013, 2015) の枠組みを概観してきたが、以下では、この枠組みを援用した拙稿 Tanigawa (2017) の分析に目を向けることにする。Tanigawa (2017) は、埋め込み節における C 削除とフェイズ性の継承を主文に拡張した分析を提案しているが、この分析に従うと、(5a) の派生は、(5b) のようになる。

(5) a. John likes cats.

b. $[_\beta = \text{C}] \text{ } [_\alpha$ John $_{[\phi]}$ T $_{[\text{u}\phi]}$ t $_{\text{John}}$ like cats]]]

主文と null-*that* 節は、 $[\text{u}\phi]$ の素性継承後に C 及び C 指定部に素性も語彙的要素も存在しなくなるという共通点がある。Tanigawa (2017) は、この共通性を基に、C 削除及びフェイズ性の継承を主文 (5a) にも当てはめている。(5b) に示すように、主文でも C 及び β の削除が削除され、C のフェイズ性を T が継承し、T がフェイズ主要部、T 指定部がフェイズ端部として再分析される。

以上、2 節では、A 移動とみなされる TP への主語の移動に的を絞り、Chomsky (2013, 2015) の枠組みと Tanigawa (2017) が提案する派生の仕組みについて概観した。

3. *Wh* 主語と空移動分析

3節以降では、2節で示した Chomsky (2013, 2015) と Tanigawa (2017) が採用する C 削除とフェイズ性の継承を基に、TP 上位への移動が含まれる A' 移動に焦点を当てる。3節では、A' 移動の代表例である *wh* 移動を取り上げ、拙稿 Tanigawa (2017) が *wh* 主語疑問文に提案した空移動分析とその利点を示す。

3.1. 先行研究における *Wh* 主語構文の扱い：空移動分析とその問題点

Wh 主語構文とは、(6a) のように、主語が *wh* 要素となる疑問文を指す。先行研究では、(6b) に示す派生と (6c) に示す派生の2つが仮定されてきた。

(6) a. Who saw Mary?

b. [_β who C [_α *t*_{who} T *t*_{who} see Mary]]

c. [_β C [_α who T *t*_{who} see Mary]]

(6b) では、主語としての機能も兼ね備える *wh* 要素 *who* が主語位置である T 指定部に一旦移動し、そこからさらに上方の C 指定部に A' 移動している。最終的に *wh* 要素が C 指定部に移動するのは、(7a) の *wh* 目的語と同様であり、(6b) や (7b) での C 指定部への移動は、*wh* 要素が演算子として機能する必然性に帰すことができる。

(7) a. Who did John see?

b. [_β who C=did [_α John T *t*_{John} see *t*_{who}]]

ここでは、(6b) の派生を仮定する分析を CP 移動分析と呼ぶ。*wh* 主語構文には、元来、*wh* 目的語構文と平行的な扱いがなされる CP 移動分析を仮定するのが主流であったが、George (1980) 以降、(6c) に示す空移動仮説 (Vacuous Movement Hypothesis) に基づく分析を仮定する研究も見られるようになった (Chomsky (1986)、Agbayani (2006)、Sakamoto (2012))。空移動仮説とは、移動が生じるのは、表層の語順に影響が出る場合に限定されるという旨の仮説である。(6a) の *wh* 要素 *who* は、上述のように、主語としての機能も兼ね備えるため、T 指定部に移動するが、この移動により、*who* が動詞 *saw* に先行する表層の語順が導かれる。ここで *who* が C 指定部に移動したとしても表層の語順に変化はないため、空移動仮説に従うと、*who* は、C 指定部へ移動せず、T 指定部にとどまったままとなる。(6c) では、結果的に、C 及び C 指定部が空のまま残ることとなるが、ここでは、(6c) の派生を擁する分析を空移動分析と呼ぶことにする。

空移動分析は、*wh* 主語を *wh* 目的語等の他種の *wh* 要素と派生上、差別化す

るという点で、興味深い分析であるが、先行研究では、いくつかの反例を基に、その妥当性が疑問視され、批判の対象となってきた。本稿では、以下、従来の空移動分析の反例及び問題点として、選択制限と強調表現の2つを取り上げることにする。まず、選択制限であるが、Grimshaw (1979) では、(8) に示すように、*wonder* のような述語は、その補部として疑問命題 (interrogative proposition) を選択しなければならないと主張されている。

(8) Predicates such as *wonder* must select interrogative propositions as their complements.

選択制限の具体例として、*wh* 目的語が現れる間接疑問文 (9 a) を見てみよう。

(9) a. I wonder who John saw.

b. [_γ I wonder [_β who_[Q] C [_α John see t_{who}]]]

(7b) でも示したが、*wh* 目的語 *who* は、動詞句内から C 指定部へと移動する。

(9a) は、間接疑問文であるため、(9b) に示すように、埋め込み節で CP 構造が構築された後に、その CP に主動詞 *wonder* が併合することになる。この CP において、疑問を表す Q 素性 [Q] を持つ *who* がその指定部を占めるため、CP は、疑問命題として機能する。主動詞 *wonder* は、その補部に疑問命題となる CP を選択するため、その選択制限が充足されることになる。これを踏まえた上で、*wh* 主語が現れる間接疑問文 (10a) に空移動分析を適用した構造 (10b) を見てみよう。

(10) a. I wonder who saw Mary.

b. [_γ I wonder [_β C [_α who_[Q] T t_{who} see Mary]]]

(6c) で議論したように、空移動分析に従うと、*wh* 主語は、C 指定部へ移動せず、T 指定部にとどまったままであるため、(10b) において網掛けの四角で囲んだ C 及び C 指定部が空のままで残ることとなる。[Q] を持つ *who* が T 指定部に残留するとなると、疑問命題となるのは CP ではなく TP となることに注意されたい。(10b) では、主動詞 *wonder* がその補部に CP を選択するが、その CP は疑問命題としては捉えられないために、*wonder* の選択制限が充足されないことになってしまう。Fukuda and Furukawa (2009) は、このような選択制限の議論から、*wh* 主語構文にも、CP 移動分析を適用するのが妥当だと主張している。

次に、第2の反例として、日本語の「一体」に対応する *on earth* や *the hell* のような疑問に関わる強調表現を取り上げる。これらの強調表現は、(11a) の *who* のように A'移動が関与する疑問詞を修飾することはできるが、多重疑問文(11b) の *what* のように A'移動が伴わない元位置の疑問詞 (*wh*-in-situ) を修飾するこ

とはできない。

(11) a. Who on earth/the hell did John see?

b. *Who saw what on earth/the hell?

Pesetsky (1987) は、この考察をもとに、当該の強調表現は、CP 指定部への顕在的 A'移動を伴う疑問詞のみを修飾できるという一般化を立てている。³ この一般化を踏まえた上で、*wh* 主語を見てみよう。(12) に示すように、当該の強調表現は、*wh* 主語を修飾することができる。

(12) Who on earth/the hell saw Mary?

空移動分析に従って、*wh* 主語が T 指定部にとどまり、C 指定部への A'移動を欠くとすると、(12) に示す強調表現の事実を説明するのが困難になる。Pesetsky (1987) の一般化が正しいとすれば、*wh* 主語も C 指定部へ A'移動すると分析するのが妥当であると考えられる。

このように、選択制限と強調表現に関する事実は、従来の空移動分析にとって大きな問題となる一方で、*wh* 主語も C 指定部へ移動するという CP 移動分析の方が妥当であることを示唆する。

3. 2. Tanigawa (2017) の代替空移動分析とその利点

3. 2 節では、Chomsky (2013, 2015) の枠組みにおける弁別的な仮定を肯定的に採用した拙稿 Tanigawa (2017) の空移動分析を概説する。本分析には、従来の空移動分析にとって反例となっていた事実を、空移動分析を維持する形で適切に処理できるという利点があることを示す。

Tanigawa (2017) は、Chomsky (2013, 2015) の仮定と派生の仕組みを援用した上で、*wh* 主語構文 (13a) に (13b) に示す空移動分析を提案している。

(13) a. Who saw Mary?

b. $\{_{\alpha} \text{who}_{[Q]} T_{[u\phi][uQ]} t_{\text{who}} \text{ see Mary} \}$

(13b) では、*wh*-DP の *who* が T 指定部へ移動した後、C が α と併合し、C から T への素性継承が生じているが、 $[u\phi]$ に付随する形で、疑問を表す Q 素性 $[uQ]$ も素性継承の対象となる。C には、素性継承の結果、素性が一つも残らないし、語彙的要素も存在しないため、C 及び β が削除され、フェイズ性が T に移行する。*who* と TP は、対になる ϕ 素性と Q 素性を持っているため、それらが併合してできた $\{_{\alpha} \text{wh-DP, TP}\}$ において、 ϕ 素性と Q 素性の 2 種類の素性が共有されることになる。C 削除の結果、この構造の根となる $\{_{\alpha} \text{wh-DP, TP}\}$ に素性共有された $\langle \phi, \phi \rangle$ と $\langle Q, Q \rangle$ のラベルが付与されることで、*wh*-DP が T 指定部にとどまる形で派生が収束する。⁴ この空移動分析は、C 及び β が削除さ

れ、フェイズ性がTに移行するという点において、従来の空移動分析と異なることになる。

Tanigawa (2017) の空移動分析 (13b) は、従来の空移動分析への反例を円滑に処理できるという利点がある。3.1節で、選択制限と強調表現を従来の空移動分析への反例として取り上げた。まず、選択制限については、(10b) で議論したように、従来の空移動分析に従うと、*wonder* の補部であるCPの指定部や主要部が空の状態であり、C指定部に [Q] を持つと考えられる *wh* 要素がないため、CPが疑問命題とならず、(8) の選択制限が充足されないことを見た。この選択制限に関する問題は、(13b) の空移動分析が採用するC削除とラベル付けに訴えることで、適切に処理できる。(14) を参照されたい。

(14) a. I wonder who saw Mary.

b. $\begin{bmatrix} \bar{\beta} \\ \bar{\alpha} \end{bmatrix} \in [\alpha \text{ who}_{[\phi][Q]} \text{ T}_{[\bar{\alpha}\phi][uQ]} t_{\text{who}} \text{ see Mary }]\bar{\beta}$

c. $[_Y \text{ I wonder } \emptyset [\alpha \text{ who}_{[\phi][Q]} \text{ T}_{[\bar{\alpha}\phi][uQ]} t_{\text{who}} \text{ see Mary }]]$

(13b) に従うと、埋め込み疑問文である (14a) の派生でも、(14b, c) のように、素性継承が生じた後に、C及び $\bar{\beta}$ が削除される。この点が従来の空移動分析との顕著な違いであるが、これに従うと、動詞 *wonder* と直接的に併合する対象は、*wh*-DPとTPが併合した $\{\alpha \text{ wh-DP, TP}\}$ になる。また、素性継承と素性共有により、 $\{\alpha \text{ wh-DP, TP}\}$ には、 $\langle \phi, \phi \rangle$ と $\langle Q, Q \rangle$ という二重のラベルが付与される。ここで、Grimshaw (1979) が言うところの疑問命題を $\langle Q, Q \rangle$ のラベルを付与された統語的要素と捉え直すと、*wonder* のような述語の選択制限は、(15) に示す通りとなる。

(15) Predicates such as *wonder* must select interrogative propositions, whose label is $\langle Q, Q \rangle$.

(14c) では、*wonder* がラベル $\langle Q, Q \rangle$ を付与された疑問命題 $\{\alpha \text{ wh-DP, TP}\}$ と併合しているため、(14a) では、空移動分析の基でも、選択制限 (15) が充足されることになる。

3.1節の (12) でもう一つの反例として挙げた *on earth* や *the hell* のような強調表現もC削除とフェイズ性の移行という観点から適切に処理できる。Pesetsky (1989) の一般化に従うと、当該の強調表現は、CPへA'移動した *wh* 要素のみを修飾することになるため、従来の空移動分析に従うと、T指定部にとどまり、C指定部へのA'移動を欠く *wh* 主語に強調表現が付く事実を説明するのが困難であるという問題があった。(13b) の空移動分析の重要な点をもう一度繰り返しておくと、(13b) では、C削除とフェイズ性の移行が伴う。C削除が生じた場合には、そのフェイズ性がTに移行すると仮定すると、単にTがフェイズ主

要部として捉え直されるだけでなく、T 指定部がフェイズ端部として捉え直されることに注意されたい。ここで、Pesetsky (1989) の一般化を最定式化し、当該の強調表現は、フェイズ端部へA'移動した *wh* 要素のみを修飾するとしよう。そうすると、(13b) で T 指定部にある *wh* 主語 *who* もフェイズ端部へA'移動した *wh* 要素とみなされるため、(12) のように、当該強調表現の修飾対象となると分析できる。

最後に、Tanigawa (2017) では紙面の都合上、議論を割愛しているが、(15b-d) の空移動分析にもう一つの利点があることを示しておく。よく知られているように、*wh* 主語構文は、主文においても主語・助動詞倒置 (Subject-Auxiliary Inversion) 及び *do* 支持 (*do*-support) が適用されないという点で、他の *wh* 疑問文と区別される。これは、(16a, b) の対比から明らかである。

(16) a. Who saw Mary?

b. *Who did see Mary?

Wh 主語構文に関して長らく問題となっているのは、なぜ *wh* 主語の場合にのみ主語・助動詞倒置や *do* 支持が適用されないのか、という問いである。(13b) の空移動分析に従うと、この問題に端的な答えを与えることができる。まず、*wh* 目的語構文 (17a) では、(17b) に示すように、*wh* 要素がC指定部に位置し、助動詞がCに具現化することは明らかで、例文は省略するが *why* や *where* のような *wh* 副詞の場合も同様である。

(17) a. Who did John see?

b. [_β who_[Q] C_[uQ]=did [_α John_[φ] T_[uφ] see *t*_{who}]]

本稿では、*wh* 目的語構文等で主語・助動詞倒置や *do* 支持が適用されるのは、以下に因ると仮定しておく。[uQ]を持つ主文のCは、本質的に接辞的 (affixal) であるため、助動詞がある場合には、その移動を誘発し、Cが助動詞と併合する一方で、助動詞がない場合には、C自体が *do* で具現化しなければならない。この仮定を踏まえて、(13b) の空移動分析に再び目を向けると、*wh* 主語構文で主語・助動詞倒置や *do* 支持が見られないのは、Cが削除され、存在していないことに還元できる。そもそも、構造上、接辞的性質を持ちうるCが存在しないのであるから、主語・助動詞倒置や *do* 支持もないのである。

以上、3節では、*wh* 主語疑問文に関する先行研究の分析とその問題点を示した上で、拙稿 Tanigawa (2017) が提案する空移動分析とその利点を示した。

4. Only 主語と否定倒置

4 節では、3 節の議論を踏襲した上で、*only* を含む句が主語となった *only* 主語文と否定倒置 (negative inversion) 構文の派生に新しい分析を提案する。*Only* 句のような否定要素が文頭に前置される現象を焦点の移動と捉えた上で、*only* 主語文にも C 削除を採用した分析を提案する。そして、この分析が否定極性項目 (negative polarity item) の認可に関する事実を適切に捉えることができると論じる。

4. 1. 否定極性項目の認可と否定要素の位置

否定極性項目とは、*any* や *ever* のように、否定の環境でしか認可されない要素のことであるが、(18) に示すように、否定文に現れれば、どの位置でも認可されるというわけではない。

(18) a. John did not give any flowers to them.

b. *Any flowers were not given to them.

(18a) の *any* は、構造上、否定要素である *not* よりも低い位置にあり、*not* によって c 統御 (c-command) されるために、認可される。⁵ その一方で、(18b) の *any* は、構造上、*not* よりも高い位置にあり、*not* によって c 統御されないために、否定文に現れてはいるものの、認可がなされず、この文は、非文となってしまう。否定極性項目の認可子は、文の中域に現れる *not* に限定されず、(19) のように、*no* や *only* のような否定形容詞や否定副詞を含む要素であってもよい。

(19) a. John gave no girlfriend any flowers.

b. At no time were any flowers given to them.

(19a) では、二重目的語構文の間接目的語に *no* が含まれており、直接目的語の中に含まれる *any* は、この間接目的語によって c 統御されることで認可される。(19b) は、否定倒置構文と呼ばれ、否定要素が文頭に現れ、主語・助動詞倒置が適用されたものである。この場合には、文頭の否定要素の中に *no* が含まれており、主語位置 (T 指定部) にある *any* は、この否定要素によって、c 統御されることで認可される。

ここで、否定極性項目の認可に関する興味深い事実を目を向けたい。Progovač (1993, 1994) による考察であるが、*only* を含む句は、否定極性項目の認可において、他の否定要素と異なる振る舞いを持つことが指摘されている。以下の (20 a, b) を (19a) と比較されたい。

(20) a. ?*John gave only his girlfriend any flowers.

b. ?*John told only Mary about any books. (Progovac (1993:176))

(20a b) では、(19a) と同様に、否定要素 *only* が動詞直後の目的語に含まれており、それが *any* を c 統御するはずであるが、適正な認可がなされない。Progovac (1993, 1994) の観察によると、*only* 句が否定極性項目を認可できる典型的な環境は、(19b) や (21a) に示す否定倒置構文である。この構文では、(21b) に示すように、否定要素が C 指定部に移動していると考えられている。

(21) a. Only to his girlfriend did John give any flowers. (Progovac(1993:176))

b. [_{CP} only to his girlfriend C=did [_{TP} John give any flowers *t_{only}*]]

Progovac (1993, 1994) は、(20a, b) と (21a) の対比をもとに、*only* 句は、C 指定部への A'移動を伴う場合のみ否定極性項目を認可できるという一般化を立てている。

しかしながら、この一般化にとって、大きな問題となる事実がある。(22) に示すように、*only* が主語に含まれる場合、否定極性項目を認可できるという事実である。

(22) Only Mary showed any respect for the visitors. (Progovac (1993:176))

本稿では、*only* が主語に含まれる場合を *only* 主語と呼ぶことにするが、Progovac (1993, 1994) は、*only* 主語に関わる事実を捉えるために、非常に例外的な仮定を立てている。*Only* 主語は、統語部門では、(23) に示すように、T 指定部に位置しているが、意味解釈に関わる論理形式 LF (Logical Form) において、T 指定部から C 指定部に非可視的な A'移動を行うという仮定である。

(23) [_β C [_α only Mary T show any respect ...]]

この仮定を採用すれば、上記の一般化を維持することができ、(22) の事実も捉えることができることになるが、この分析には注意が必要である。Progovac (1993, 1994) が採用する LF での非可視的移動は、1990年代まで、*wh* 要素や数量子等の演算子に広く仮定されていたものである。その後、2000年代に入ると、非可視的移動は、生成統語理論において、操作として認められないこととなったが、本稿では、非可視的移動そのものの妥当性を批判するつもりはない。しかしながら、ある程度、察しがついていると思われるが、Progovac (1993, 1994) の分析には、事実を捉える上で、非常に大きな欠点がある。*Only* 主語に非可視的移動を適用できるのであれば、(20a, b) の *only* 目的語にも同様の移動が仮定できる。そうすると、今度は、(20a, b) で否定極性項目が認可されない事実をどのように処理するかが問題となる。

このように、Progovac (1993, 1994) が行った *only* の否定極性項目の認可に関する考察は、非常に興味深いものであるが、事実を体系的に捉えることができ

ないという点で重大な問題がある。

4. 2. Only 主語の代替分析

4. 2 節では、3. 2 節で示した Tanigawa (2007) の *wh* 主語構文に対する空移動分析を拡張する形で、*only* 主語に代替分析を提案する。この分析に従うと、4. 1 節で見た否定極性項目の認可に関する事実を適切に処理できることを示す。

本節では、まず、否定倒置構文の派生を示すことから議論を始める。本稿は、Rizzi (1997) や Haegeman (2000) 等に従って、否定倒置構文を焦点に関わる構文とみなし、(24a) に (24b) に示す派生を仮定する。

(24) a. Only to his girlfriend did John give any flowers.

b. [_β only to his girlfriend_[Foc] C_[uFoc]=did [_α John T
give any flowers *t*_{only}]]

(24b) に示すように、*only* 句は、焦点を表す focus 素性 [Foc] を持つ形で動詞句内に基底生成される。対を成す focus 素性 [uFoc] を持つフェイズ主要部 C が α と併合した後、*only* 句は、C 指定部へ A' 移動する。この移動により、*only* 句と CP の間で focus 素性の共有が行われることになる。否定倒置では、主文での疑問文と同様に、主語・助動詞倒置もしくは *do* 支持が義務的に適用されるが、本稿では、[uQ] だけでなく、[uFoc] を持つ C も本質的に接辞的であるため、C への助動詞の移動や C の *do* での具現化が要求されると仮定しておく（主節疑問文での倒置については、3. 3 節の最後を参照）。

上記の仮定を踏まえた上で、本稿が提案する *only* 主語の代替分析を示すことにする。本稿の分析に従うと、(25a) は、(25b) の手順で生成される。

(25) a. Only Mary showed any respect for the visitors.

b. $\{_{\beta} = \epsilon$ [_α only Mary_{[ϕ][Foc]} T_{[uϕ][uFoc]} *t*_{subj.} show any respect]_β

(25b) に示すように、[Foc] を付与されている *only* 主語は、基底生成された動詞句内からの移動の結果、T 指定部に位置している。フェイズ主要部 C が α と併合すると、C から T への素性継承が生じるが、[u ϕ] に付随する形で、[uFoc] も T への素性継承の対象となる。*Only* 主語と TP は、ともに ϕ 素性と Foc 素性を持っているために、それらが併合してできた $\{_{\alpha} DP, TP\}$ において、 ϕ 素性と Foc 素性の 2 種類の素性が共有されることになる。そして、C には、素性継承の結果、素性が一つも残らないし、語彙的要素も存在しないため、C 及び β が削除され、フェイズ性が T に移行する。この分析では、2 節で示した *wh* 主語構文の空移動分析において、*wh* 主語だったものが *only* 主語に、Q 素性だったものが Foc 素性にとって代わる形になっている。⁶

(25b) の分析に従うと、Progovac (1993, 1994) の分析にとって問題となっていた事実が円滑に処理できる。*Only* 句が否定極性項目を認可できるのは、C 指定部に A' 移動している場合に限られるという Progovac (1993, 1994) の一般化を思い出されたい。本稿では、この一般化を *only* 句が否定極性項目を認可できるのは、フェイズ端部に A' 移動している場合に限られると最定式化する。この再定式化した一般化及び (25b) の分析に従うと、*only* 主語が否定極性項目を認可できるのは、明白である。すなわち、(25b) に示すように、C 及び β が削除され、フェイズ性が T に移行することにより、T 指定部がフェイズ端部として再分析されているわけであるから、フェイズ端部にある *only* 主語が否定極性項目を認可できるのである。

(25b) の分析には、*only* 句及び否定倒置一般に関わる別の事実を円滑に処理できるという点でも利点がある。再び、これも *wh* 疑問文と同じ特性ということになるが、*only* 句や *no* 句等の否定要素が文頭に移動した場合には、(26a, b) の違いからも明らかなように、主語・助動詞倒置もしくは *do* 支持が義務的に適用されなければならない。

(26) a. *Only John Mary likes.

b. Only John does Mary like.

ただし、これは、否定要素が目的語や副詞である場合に当てはまる規則であり、この唯一の例外は、(27a) のように、否定要素が主語の場合である。

(27) a. Only Mary likes John.

b. *Only Mary does like John.

これらの事実も C 削除の違いに還元できる。(24b) で述べたように、本稿では、[uFoc] を持つ C が本質的に接辞的であるため、そのような C が存在する場合には、C への助動詞の移動や C の *do* での具現化が要求されると仮定している。また、本稿の分析に従うと、否定要素が目的語や副詞である場合には、[uFoc] を持つ C が存在するが、否定要素が主語の場合には、(25b) に示すように、そもそも C が削除され、存在していない。本稿の議論に従うと、主語・助動詞倒置や *do* 支持に関する否定主語とそれ以外の要素の違いは、C が削除されているか否かに起因することになる。否定要素が主語の場合には、そもそも C が削除されて存在しないため、(27a) のように、主語・助動詞倒置や *do* 支持も適用されないのである。

以上、3 節では、焦点の移動が関与する *only* 主語文に C 削除とフェイズ性の継承を採用した空移動分析を提案し、この分析が否定極性項目の認可に関する特異な事実を適切に捉えることができると論じた。

4. 話題・主語卓越性と話題主語

4節では、話題と主語に関する言語類型論をもとに、日本語と英語における話題化及び話題主語の議論を行う。本節でも、3節と同様に、2節で示した空移動分析を異種のA'移動である話題化に拡張し、話題主語構文でもC削除とフェイズ性の継承が適用されると提案する。

4.1. 話題化の適用と派生：話題卓越性言語と主語卓越性言語

言語類型論の一つとして、Charles and Thompson (1976) によって、話題卓越性 (topic-prominent) と主語卓越性 (subject-prominent) という分類が提案されている。Charles and Thompson (1976) では、類型を行う上で複数の基準が用いられているが、本稿では、話題 (主題) が重視され、話題-解説の文構造を中核とする言語を話題卓越性言語と定義し、主語が重視され、主語-述語の文構造を基底とする言語を主語卓越性言語と定義しておくことにする。話題卓越性言語として代表的なのは、日本語であるが、この種の言語では、「その写真は、太郎が撮った」のように、話題が構造上高い領域に存在し、文の残余部分において、話題に関する解説が行われる文構造が典型である (É. Kiss (1995) も参照)。その一方で、主語卓越性言語には、英語を含むインド・ヨーロッパ語族の言語が分類され、主語が構造上高い領域で明示化され、文の残余部分が述語として機能する。ただし、それぞれの言語で話題もしくは主語が重視されるという概念であるため、話題卓越性言語には、主語が存在しない、主語卓越性言語には、話題要素や話題化という現象が存在しない、ということではない (異なる見解については、三上 (1953) を参照)。近年の生成統語論の枠組みを用いて、話題卓越性と主語卓越性を分析した研究として Miyagawa (2010) がある。本稿の以下での主張と提案は、Miyagawa (2010) のそれと一致する部分もあるが、主語とそれ以外の話題化で移動の着地点が異なる点、動詞句内に主語が残留することを想定しない点等において、違いがあることを先に述べておく。

以下、本節では、話題卓越性言語としての日本語について、生成統語論の観点から分析を提案する。日本語は、話題を係助詞「は」で標示し、文頭に置くのが典型であり、主語以外の要素も話題となる。本稿では、まず、(28a) の目的語のように、主語以外の要素が話題として機能する場合には、Rizzi (1997) や Haegeman (2000) 等に従って、(28b) のように分析する。

(28) a. その写真は、太郎が撮った。

b. [_β その写真は_[TOP] [_α 太郎が *t*_{obj} 撮った T_[uφ]] C_[uTOP]]

「は」で標示される話題要素は、話題を表す topic 素性 [Top] を付与された状態で派生に組み入れられる。本稿では、「は」の標示と [Top] の付与が連動していると仮定しておく。対を成す topic 素性 [uTop] を持つフェイズ主要部 C が α と併合した後、話題要素は、動詞句内から C 指定部へ A' 移動する。この移動により、話題要素と CP の間で topic 素性の共有が行われることになる。例文は省略するが、この分析は、「東京には、太郎が行った」のように後置詞句が話題要素になった場合にも当てはまる。また、この分析は、大筋で、(29a) のような英語の話題化 (topicalization) 構文にも適用できる。

(29) a. That picture, John took.

b. [_{β} that picture_{e[Top]} C [_{uTop}] [_{α} John_[ϕ] T_[u ϕ] take *t*_{obj.}]]

上述のように、主語卓越性言語である英語にも話題化という現象が存在することに注意されたい。

次に、主語が「は」で標示される話題主語の派生を示すことにする。本稿では、2節及び3節で示した空移動分析を援用し、話題主語でも C 削除が適用されると分析する。

(30) a. 太郎は、写真を撮った。

b. [_{β} [_{α} 太郎_{は[ϕ][Top]} *t*_{subj.} 写真を撮った T_{[u ϕ][uTop]}]]=C_子

(30b) に示すように、[Top] を付与されている話題主語は、基底生成された動詞句内からの移動の結果、T 指定部に位置している。フェイズ主要部 C が α と併合すると、C から T への素性継承が生じるが、[u ϕ]に付随する形で、[uTop] も T への素性継承の対象となる。話題主語と TP は、ともに ϕ 素性と Top 素性を持っているために、それらが併合してできた $\{_{\alpha} DP, TP\}$ において、 ϕ 素性と Top 素性の2種類の素性が共有されることになる。そして、C には、素性継承の結果、素性が一つも残らないし、語彙的要素も存在しないため、(30b) に示すように、C 及び β が削除され、フェイズ性が T に移行する。

本節では、最後に、話題卓越性と主語卓越性が統語理論上、何に還元できるかについて言及をしておく。本稿では、日本語のような話題卓越性言語の場合、(28b) や (30b) のように、語彙要素の一つが [Top] を付与される形で派生に組み入れられ、フェイズ主要部 C も [u ϕ]に加えて、[uTop] を持つことが派生のプロトタイプとなるという立場をとることにする。その一方で、英語のような主語卓越性言語の場合には、語彙要素にしる C にしろ、topic 素性の付与に関する強制力は強くないため、文中に話題が存在する必然性がないと考えることにする。すなわち、主語卓越性言語では、(29b) のように、語彙要素の一つが [Top] を付与され、フェイズ主要部 C が [uTop] を持つ派生が適用可能ではあるが、派

生のプロトタイプとはならない。

4. 2. 英語の話題主語

4. 2 節では、英語の話題化に焦点を当てるが、英語の話題化が形態的にも日本語の話題化と異なるのは明白である。4. 1 節で述べたように、日本語の話題要素には、「は」のような助詞が付くが、英語には、形態的に話題であることを示す手がかりはない。目的語や前置詞句等が話題化された場合には、(29a) のように、表記上、コンマを伴うが、これは、「は」のように語に拘束されるものではない。この議論と関係する大きな問題として、そもそも英語に話題主語が存在するののかという問題がある。(31a) を参照されたい。

- (31) a. He loves her.
 b. 彼は彼女を愛している。
 c. 彼が彼女を愛している。

(31a) では、主語が代名詞 *he* であるが、文脈がなければ、この *he* が (31b) の「彼は」のように話題として機能する要素なのか、(31c) の「彼が」のような総記 (exhaustive listing) の解釈を持つ焦点的な要素なのかはわからない。また、目的語や前置詞句等の場合と異なり、表記上、コンマを伴うわけでもない。本稿では、英語に話題主語が存在するか否かについて答えを出すことはできないが、以下では、英語にも話題主語が存在すると想定した議論を行う。(32a) が話題主語文であるとすれば、日本語の話題主語 (30a) と同様の分析が適用できる。

- (32) a. He loves her.
 b. $\text{[}_{\beta} \text{E} \text{[}_{\alpha} \text{he}_{[\phi][\text{uTop}]} \text{T}_{[\text{u}\phi][\text{uTop}]} \text{t}_{\text{subj}} \text{love her]}]$

派生の過程は、(30b) とほぼ同様であるため、詳細な説明は省略するが、重要なのは、話題主語が T 指定部に残った状態で派生が完結するという点である。

ここで、話題主語の派生にもう一つの可能性があるものの、理論と事実の両方の側面から、この可能性が支持されないことを示しておく。2. 1 節において、*wh* 主語構文には、従来、CP 移動分析と空移動分析の 2 つが仮定されてきたことを見た。CP 移動分析では、*wh* 主語が T 指定部を経由して C 指定部に移動することになるが、話題主語にも同様の派生の可能性 (33) がある。

- (33) $[\beta \text{he}_{[\phi][\text{uTop}]} \text{C}_{[\text{u}\phi][\text{uTop}]} [\alpha \text{t}_{\text{subj}} \text{T}_{[\text{u}\phi]} \text{t}_{\text{subj}} \text{love her }]]$

(33) では、 $[\text{uTop}]$ が素性継承されず、C に残留したままであるため、話題主語は、T 指定部から C 指定部へ移動することになる。脚注 4 と 6 で言及しているように、この派生は、 α に付与されたラベル $\langle \phi, \phi \rangle$ が外れてしまうという点で、理論上、排除されるのだが、言語事実の観点からも、空移動分析を採用した

(32b) の派生が好ましいことが示唆される。Lasnik and Saito (1992) 等で指摘されている再帰代名詞 (reflexive pronoun) に関する事実 (34a, b) を参照されたい。

(34) a. John_i thinks that himself_i, Mary likes.

b. *John_i thinks that himself_i likes Mary.

再帰代名詞 *himself* は、(34a) のように、目的語として基底生成され、埋め込み節の節頭に話題化された場合には、主節主語 *John* と同一指示が可能である (下付きの *i* は、2つの要素が同一指示であることを指す)。しかしながら、*himself* が埋め込み節主語である (34b) の場合には、同一指示が不可能である。目的語話題化 (34a) の場合、補文標識 *that* が入る C と話題要素が位置する C の 2つが必要になるため、本稿では、Authier (1992) や Watanabe (1993) が主張するような多重 CP 構造を採用するが、これに基づくと、(34a) には、(35) に示す派生が想定できる。

(35) [_S John think [_γ C2=that [_β himself_[Top] C1_[uTop] [_α Mary_[ø] T_[uø]...]]]]

(35) では、*that* が上位の C である C2 の主要部として具現化している一方で、目的語として動詞句内に基底生成された再帰代名詞 *himself* は、話題化により、下位の C である C1 の指定部に移動している。再帰代名詞は、局所的な領域内で先行詞に c 統御されなければならないが、本稿では、埋め込み節の C 領域は、主節の先行詞 *John* の局所的領域に含まれると仮定しておく。⁷ これを踏まえた上で、*himself* が埋め込み節主語である (34b) の派生を示すことにする。本稿の空移動分析に従うと、仮に *himself* が topic 素性 [Top] を付与された話題主語であったとしても、(36a, b) のように、C1 指定部に移動することはない。

(36) a. $\left[\begin{array}{c} \text{C} \\ \text{p} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \alpha \\ \text{u} \end{array} \right] \text{himself}_{[\emptyset][\text{Top}]} \text{T}_{[\text{uø}][\text{uTop}]} t_{\text{subj}} \text{like Mary} \left] \right]$
 b. [_S John think [_γ C2=that ø [_α himself_{[ø][Top]} T_{[uø][uTop]} t_{subj} like Mary]]]]

[Top] を付与されている *himself* は、基底生成された動詞句内からの移動の結果、T 指定部に位置している。フェイズ主要部 C が α と併合すると、C から T への素性継承が生じるが、[uø] に付随する形で、[uTop] も T への素性継承の対象となる。結果的に、C1 には、素性継承の結果、素性が一つも残らないし、語彙的要素も存在しないため、C1 及び β が削除され、*himself* は、T 指定部に残ったままで派生が完結する。(34a, b) で仮定したように、埋め込み節の C 領域は主節の先行詞 *John* の局所的領域に含まれるとしよう。そうすると、(36a, b) で *himself* が位置しているのは、C 指定部ではなく T 指定部であり、先行詞 *John*

の局所的領域にはないため、同一指示が不可能ということになる。仮に話題主語が、(33)のように、T 指定部から C1 指定部への移動を伴うとすると、誤って、同一指示が可能になると予測されてしまう。よって、話題主語は、話題目的語等と異なり、T 指定部にとどまったままと分析することが妥当だということになる。

ここまででは、(32a) が話題主語文であると想定した上での議論を行ってきたが、英語においても話題主語という位置付けをせざるをえない現象が存在する。

(37a, b) に示すように、*that* 節や *to* 不定詞節が主語となった文主語である。

(37) a. That John is honest is clear.

b. To please our boss is difficult.

すべての文主語がそうであるわけではないが、少なくとも (37a, b) に挙げる文主語構文は、(38a, b) のように、仮主語 *it* を用いた *it* 外置構文での置き換えが可能である（置き換えができない場合を含めた詳細については、稲田（1989）を参照）。

(38) a. It is clear that John is honest.

b. It is difficult to please our boss.

Hooper and Thompson (1973 : 475–476) によれば、*it* 外置構文で文末に現れる *that* 節及び *to* 不定詞節は、断定的 (assertive) に用いることができる一方で、文主語の当該節は、断定的に用いることができず、常に前提的 (presupposed) である。これを情報構造の観点から捉え直すと、外置された当該節は、その文の新情報となりうるが、文主語の当該節は、旧情報を担う要素であって、新情報を表すことができないということになる。この情報構造上の特性は、話題化構文の特性と共通していることに気付かれたい。話題化構文では、文頭に移動する話題要素が旧情報を担う要素であるため、文主語と話題要素は、前提的で、旧情報を担う要素であるという点で共通している。また、(39a) と (39b) の対比から明らかのように、*it* 外置構文は、主語・助動詞倒置を適用して疑問文化することが可能である一方で、文主語構文では、同様の疑問文化が不可能である。

(39) a. *Is that the earth is round obvious to you?

b. Is it obvious that the earth is round? (Kuno (1973 : 363))

このような文主語の特異な特性は、名詞句主語と異なり、文主語が常に話題主語として位置付けられ、常に (32b) と同様の派生が適用されなければならないことに起因すると筆者は考えている。⁸

ここまで本節では、英語の話題主語に限定した議論を行ってきたが、最後に、ドイツ語に関して簡潔な議論を行うことにする。ドイツ語は、英語と同様に、ゲルマン語及び主語卓越性言語に分類されるが、主文に関しては、むしろ日本語の

ような話題卓越性言語に近い。主文の文頭には、第一要素として、話題（主題）として機能する要素が置かれ、その後ろに第二要素として動詞が置かれるという動詞第二位（verb second）の構造が得られる。例えば、目的語が文頭に置かれている（40a）は、Müller and Sternefeld（1993）や Vikner（1995）の分析を本稿が採用する枠組みで捉え直すと、（40b）の派生を持つと考えられる。

- (40) a. Diesen Film haben die Kinder gesehen
 This_{ACC} film have the_{NOM} children seen
 ‘This film, the children saw.’
 b. [_β diesen Film]_[Top] C [_{uTop}]=haben [_α die Kinder]_[φ] T_[uφ] t_{obj} gesehen]]

この派生は、（28b）と（29b）に示す日本語及び英語の話題化の派生とほぼ同様で、異なるのは、Cに助動詞が入るか本動詞が動詞句内で目的語に先行するかのみである。当然、ドイツ語の主文でも主語が第一要素になることはあるが、4.1節の最後に述べたように、話題卓越性言語では、フェイズ主要部Cが[uφ]に加えて、[uTop]を持つことを基本とすると考えると、ドイツ語で主語が第一要素になる主文（41a）には、（41b）のような派生を想定できる。

- (41) a. Die Kinder haben diesen Film gesehen.
 The_{NOM} children have this_{ACC} film seen
 ‘The children saw this film.’
 b. [_β]=ε [_α die Kinder]_{[φ][Top]} T_{[uφ][uTop]}=haben t_{subj} diesen Film gesehen]]

（41b）では、日本語や英語の話題主語と同様に、C及びβが削除され、主語がT指定部にとどまった状態で派生が完結することになる。この場合、結果的に、目的語が第一要素である（40b）と同様に、動詞が第二位となる構造が得られるが、助動詞 *haben* がCに入るか、Tに入るかの違いが生じることになる。ドイツ語において主語を第一要素とする主文（41a）でも、管見の限り、（33）のように、主語がT指定部からC指定部へ移動すると仮定する分析が従来の研究の主流であった。本稿の分析に従えば、第一要素が主語である場合とそうでない場合で、派生及び構造が大きく異なることになるが、この分析の妥当化については、今後の研究に委ねることにする。

以上、4節では、2節及び3節で示した空移動分析を話題化に拡張し、話題主語構文にもC削除とフェイズ性の継承が適用されるという提案を行った。

5. おわりに

本稿では、Chomsky (2013, 2015) の枠組みとそれを援用した拙稿 Tanigawa (2017) の派生の仕組みを用いて、C 削除とフェイズ性の継承という観点から、焦点と話題の移動を中心とした A' 移動に新しい分析を提案した。

謝辞

本稿は、Fukuoka Linguistic Forum 2017 (於福岡大学) における口頭発表 “C-Deletion and Phasehood Inheritance: Consequences for A'-Movement” を基にしたものである。まず、同フォーラムにおいて発表の機会を与えてくださった福岡大学の久保善宏先生に感謝したい。また、同じ組織の教員としてご一緒させていただいたのは、2年という短い期間であったが、日頃から大学教員及び言語学者の大先輩として教育面や研究面で貴重なご助言をくださるとともに、同席させていただいたお食事の場等でも、常に言語学を中心とした深い学術的見識を与えてくださった稲田俊明先生にこの場を借りて御礼申し上げたい。

注

- ¹ [u ϕ] の u は、非付値を表す unvalued の頭文字を取ったものである。非付値素性は、対を成す付値 (valued) 素性と一定の関係性を構築することで削除され、値を付与されることになるが、本稿では、この部分には立ち入らないことにする。付値と非付値の対は、 ϕ 素性以外にも、本稿が採用する Q 素性、topic 素性、focus 素性にも一般に仮定されている。
- ² 本稿では、削除操作が行われたことを二重取り消し線で表し、削除の痕跡を \emptyset で表す。
- ³ 英語の当該強調表現は、日本語の「一体」とは異なり、*wh* 要素に隣接している必要もある。
- ⁴ 当然、この空移動分析を妥当化するには、*wh* 主語が T 指定部から C 指定部に移動する CP 移動分析を反証する必要がある。詳細については、Tanigawa (2017) を参照されたいが、Chomsky (2013, 2015) の枠組みに従うと、*wh* 主語が T 指定部から C 指定部に移動した場合、 α に付与されたラベル $\langle \phi, \phi \rangle$ が外れるために、CP 移動分析は理論的観点から維持できない。
- ⁵ 一般に採用されている c 統御の定義は、(i) である。
(i) X c-commands Y iff X and Y are categories and X excludes Y and every category that dominates. X dominates Y. (Kayne (1994:16))
- ⁶ *Wh* 主語と同様に、*only* 主語にも、原理上、T 指定部から C 指定部への顕在的移動が適用されるという CP 移動が想定できる。しかしながら、脚注 4 で述べたように、この移動が生じると、 α に付与されたラベル $\langle \phi, \phi \rangle$ が外れるために、CP 移動分析は採用できない。
- ⁷ 同一指示の局所的領域は、フェイズに還元できるはずであるが、本稿では、この部分まで深入りしないことにする。
- ⁸ 複雑な理論的議論が必要となるため、本稿では、文主語の特異性に関する議論を省略するが、詳細については、拙稿 Tanigawa (2018) を参照されたい。

参考文献

- 稲田俊明 (1989) 『補文の構造』大修館書店 東京.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 東京 (復刊 1972 くろしお出版 東京).
- Agbayani, Brian (2006) "Pied-Piping, Feature Movement, and *Wh*-Subjects," *Wh-Movement: Moving on*, ed. by Lisa Cheng and Norbert Corver, 71-93, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Authier, Jean M. (1992) "Iterated CPs and Embedded Topicalization," *Linguistic Inquiry* 23, 329-336.
- Charles, Li and Sandra Thompson (1976) "Subject and Topic: A New Typology of Language," *Subject and Topic*, ed. by Charles Li and Sandra Thompson, 457-489, Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- É. Kiss, Katalin (1995) *Discourse Configurational Languages*, Oxford University Press, Oxford.
- Furukawa, Takeshi and Minoru Fukuda (2009) "On the Vacuous Movement Hypothesis," *Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities* 16, 265-279.
- George, Leland (1980) *Analogical Generalizations of Natural Language Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Grimshaw, Jane (1979) "Complement Selection and the Lexicon," *Linguistic Inquiry* 10, 279-326.
- Haegeman, Liliane (2000) "Inversion, Non-adjacent Inversion and Adjuncts in CP," *Transaction of the Philosophical Society* 98, 121-160.
- Hooper, Joan and Sandra Thompson (1973) "On the Applicability of Root Transformations," *Linguistic Inquiry* 4, 465-497.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Kuno, Susumu (1973) "Constraints on Internal Clauses and Sentential Subjects," *Linguistic Inquiry* 4, 363-385.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move Alpha: Conditions on Its Application and Output*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move? Unifying Agreement-based and Discourse*

- Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Müller, Gereon and Wolfgang Sternefeld (1993) "Improper Movement and Unambiguous Binding," *Linguistic Inquiry* 24, 461-507.
- Pesetsky, David (1987) "Wh-in-Situ: Movement and Unselective Binding," *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric Reuland and Alice ter Meulen, 98-129, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Progovac, Ljiljana (1993) "Negative Polarity: Entailment and Binding," *Linguistics and Philosophy* 16, 149-180.
- Progovac, Ljiljana (1994) *Negative and Positive Polarity*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Sakamoto, Akihiko (2012) "Feature Inheritance and Vacuous Movement," *English Linguistics* 29, 316-343.
- Tanigawa, Shin-ichi (2017) "In Defense of the Vacuous Movement Hypothesis for Wh-Subjects: Perspectives from the Framework of Chomsky (2013, 2015)," *Studies in English Literature* English Number 58, 57-76.
- Tanigawa, Shin-ichi (2018) "Agreement, Labeling and Sentential Subjects," *English Linguistics* 34, 302-330.
- Vikner, Sten (1995) *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford University Press, New York.
- Watanabe, Akira (1993) "Larsonian CP Recursion, Factive Complements and Selection," *NELS* 23, 523-537.